ぎてはいないだろうか。——そういう次第で、「augment の省略という自由は、特にホメロス詩にのみ属するものではなく、従ってアルカイオスやサッポーは、ホメロスの模倣者としてではなく、それぞれ一名の詩人として、その自由を持ち得たのである」というHoffmann（Die griechische Dialekte）の主張を取り上げるのである。

同様に, μολδσρπνδsに見られるpositio debilisも、Lobelが言うようにレスポス詩にとって異質的なものではなく、そこにはやはりある種の古い伝統が考えられてよいことが示される。

そして、このように見れば、サッポー詩において abnormal と考えられている諸点も、その abnormal である理由を失うであろう。そもそも normal とか abnormal とかいう考え方があるのであって、そういう規格で律しきれないところこそ、真の poesia はあるのである。——これが著者の根本主張である。

成程、Lobel的的方法には、マルツロの指摘するような弊がないとも思われる。しかし、一方Lobelにいわせれば、マルツロの単に否定的な議論から何か生まれるのかということがなるであろう。結局は、どちらが正しくどちらが正しくないということではなくて、気質と傾向の問題であるかもしれない。ともかく、本書に見られる著者の態度——誇くまでも抽象に耽接まず、与えられた現実から眼をそらしてもfalseな態度と、派手なホレミックの中で思いきった議論を展開するそのやり方には、やはりイタリア的な気質、そして学風がうかがえるとだけはいえるであろう。

中 村 善 也（京都府立大学）


特別な意味で人々の口にのぼるデウス・エクス・マキナという言葉は別にして、ギリシア悲劇におけるデウス・エクス・マキナの真の意味は必ずしも明らかにされているとはいえない。フランクフルトのゲーテ大学に提出された、著者の学位請求論文である本書は、現存ギリシア悲劇にあらわれるデウス・エクス・マキナのすべての場合（ソポクレスに一つ、エウリピデスに九つ）の考察を通じて、その本質に迫ろうとした労作である。

デウス・エクス・マキナは、エウリピデスに特徴的な技巧として、同じくエウリピデスに独特なプロロゴスとともに、特殊の考察を我々にうながしているが、著者によれば、デウス・エクス・マキナの場合の理解の困難さは、幾つかの理由で、プロロゴスの場合よりもいっそう大きい。デウス・エクス・マキナがエウリピデス劇における
神の問題といういっそう厄介な問題に結びついていると考えられる他に、単に劇技巧の問題としても、この意味でのプロローグの役割が一応は理解しやすい（それが与える Information が Handlung の Spannung を高めている見事な例は、たとえば「イオン」を思い浮かべてであろう）に反して、デウス・エクス・マキナは、Handlung との関係というこの点でも理解しにくい。さらに、デウス・エクス・マキナによる Epilog は、プロローグとは違って、その向けられる対象が、観客だけではないに、むしろ直接的には舞台上の人物であることが、問題をいっそう複雑にしている。——しかし、それならば、それに対処する方法もまたおのずから明らかなのでないか。つまり、デウス・エクス・マキナは舞台上の人物にとってどういう意味を持っているのか、それは劇全体とどう結びついているのか、それが問われるべきであろうと著者は考える。そして、このことが、本書にとって根本的な方法となっているのである。

こうして、先ずソポクレスの「ピロクテテス」とエウリピデスの「イオン」を材料にして、デウス・エクス・マキナの二つの型が論ぜられるのであるが、そのさいにも、それぞれの作品の全体解釈が問題となりねばならない。この二つの劇の、可成りこまかい分析と解釈が与えられているのはそのためである。そして、その結果明らかにされるのは、「ピロクテテス」におけるヘラクレスの出現は、この作品全体を貫くEthopoiie の必然の結果として生じたSituation——ネオブトレモスがピロクテスを故郷へ（トロイアへではなく）送りとけねばならなくなるという——を断ち切るために要請されたものであるが、「イオン」におけるアテナの登場は、それとは違って、プロローグで示されているアポロンの意図（神の Intrige といってよい）が、それへの Gegenintrige（クレウサによるイオン殺害計画、その他）によって危険におとしいれられながらも結局は実現され、こうして restitutio ordinis が果たされるという意味での、Prolog-Handlung-Epilog の相関関係の中にその必然性を持っているということなのである。

ところで、エウリピデスにおいて、いっそう早い時期の「ビッポリュトス」「アンドロマケ」「エレクトラ」などでは、アガサ的な Situation がデウス・エクス・マキナを呼び出すというにとどまっていたと考えられるに対して、「イオン」に見られるデウス・エクス・マキナでは、劇そのものとの結びつきがいっそう緊密になっているということになる。そして、このようなデウス・エクス・マキナの成立には、「タリリケのイピゲネイア」「ヘレネ」「イオン」などの所謂 Intrigenstücke の系列があろうかっていたと考えられる。その場合、「イピゲネイア」「ヘレネ」ではまだ微弱でしかなかった Gegenintrige の要素が、「イオン」においては十分強力となっており、従ってデウス・エクス・マキナの必然性は、全体の劇構成の中でいっそう完全なものとなってい
るというのである。こうして、「イオン」は、このタイプのデウス・エクス・マキナの、そしてエウリピデス的なデウス・エクス・マキナの、一つの頂点をなしていると見られる。

これに対して、「ピロクテテス」にあらわれる種類のデウス・エクス・マキナは、徹底したEthopoieの追求から生じたGrenzsituationを解消するための手段であって、従って一種のKnotenlösungともされるべき性質のものであった。そして、この種のソポクレス的デウス・エクス・マキナが、「オレステス」においてはエウリピデスにも影響を与えていることが主張される。つまり、「オレステス」においてデウス・エクス・マキナの登場が必至となるのは、オレステス姉弟の救済という目的が、メネラオスのκακόςな性格によって危うくされるからであると解釈されるのである。そして、ここでも、σωματικόςとκακίαというものを軸にした、作品全体の解釈が基盤になっていることは変わりがない。

以上のように、デウス・エクス・マキナを劇全体との関連においてとらえるとすることは、従来のデウス・エクス・マキナ論に見られなかった新らしい立場を提示するものであって、そこに、本書がこの問題に対してあたえた貢献があるといえるであろう。この立場によれば、デウス・エクス・マキナ理解への努力が、個々の作品の解釈を義務づけるということにもなるのであって、たとえば、そのようにして生まれた著者の「イオン」解釈は、それ自体としても、一つの本格的読説論になっているといえよう。しかし、著者のこの立場によってデウス・エクス・マキナの問題が解釈されつづくことは思われない点もあるのである。たとえば、著者の体系の中では、「ヒケティディス」のそれのようなデウス・エクス・マキナは、もうひとつはっきりした位置を与えられていないように思えるのである。「ピロクテテス」のそれはとてもかくとしで、「オレステス」のデウス・エクス・マキナをもEthopoieという名のもとに考えることも、私としては異論がなくもない点の一つである。しかし、これらの問題に立ちこなっていることは、別の場合に譲るべきであろう。

いずれにしても、本書は、その創見にみちる方法と周到な用意によって、今後この問題に近づこうとする者が必ずその前に立ちとまらねばならぬ一つの道標となることは確かであろう。

中 村 善 也 (京都府立大学)